山 595-1994・12・20

第595号 平成6年12月20日発行(毎月20日発行)
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

兵庫県八チ高原で一九九四年全国支部懇談会

――百二十九名が参加して開催――

今年の全国支部懇談会は、十月十五日～十六日にかけて、兵庫県北部のハチ高原で開催された。

記録づくめの猛暑もようやく去り、関西地方も久しぶりの秋晴れに恵まれた。ハチ高原にはパラセールを楽しむ人々が青空にポッカリ浮かび、さわやかな午後、受け付け準備を終えた。

一時三十分、早々と藤平会長が到着。二時前後には自家用車組が続々と来場。三時過ぎ、姫路からの直行バスが着くと、狭いロビーは急に賑やかになった。

懇談会の開会は四時十分、西村委員の司会で始まった。

関西支部・阿部支部長の開会の挨拶、続いて藤平会長から「アメリカ・オレゴン州マザマス山岳会百周年式典に招待され、地元山岳会会長から『堅苦しい挨拶は抜き、三分間で、ジョークを入れて』スピーチするように言われたが、富山に研修留学にきていた語学の天才坊やといっても二十四歳ですが、の通訳でうまくいった」ことなど、ユーモアを交えて歓迎の挨拶をされた。

四時三十分「ブナと加藤文太郎」の記念講演を、永年会員・片山英一氏が行った。

「ブナを植える会」発足の経緯、第一回の植林は、約千本の苗木を兵庫県を中心とした二十四名の会員で、鉢伏西尾根で始めたこと、地元町村との調整、活着するまでの苦労話。十五年を経て四～五メートルくらいになったブナの木に対する愛着などが語られた。

十五年の地道な活動の結果、近年、加藤文太郎の生地・湯坂町が非常に協力的で、何か「縁」のようなものを感ずる、と結ばれ、講演を終えた。

その後、支部紹介があり、北海道の常連・平野さん、柳田さん、信濃の八十六歳でお元気な宮原さん、福岡は吉村さん、熊本の本田さんなど参加者は百二十九名であった。

六時十五分から懇親会、乾杯は本部の小倉常務理事。元気で登山されている方々の食欲はさすがに旺盛で、バイキングスタイルでテーブルに並べられた料理は、アッという間になくなった。

多数の参加者を得てなごやかに、支部懇談会

1994年（平成6年）
12月号（No. 595）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

1994年全国支部懇談会……1
マカルー東稜に挑む第3報……2
報告
探検山行・氷河を科学する……4
新入会員の集い……4
第36会有志閑談会……5
自然保護随想・静かな山……5
支部だより
北陸三支部合同登山……6
宮崎ウエストン祭覚書……6
海外の山……7
東西南北
ブラバンド名誉会員を訪ねて…9
改装された静かなルーム……9
俳句・大杉谷……10
コーカサス・ヒマラヤを行く…10
短歌・ぬくもりの岩……11
詩・五彩の雲……11
山と自然の断章(11)……11
続報・『四松庵』の寄せ書き……12
神の恵み給うたコンデ・リの頂 12
山と医療・凍傷について……13
図書紹介・書籍受入報告……14
名誉会員動静・ルーム日誌……16
海外情報……16
新入会員・住所変更……17
会務報告……18
INFORMATION・会員異動……19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日　10～20時
水・金曜日　13～20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13～20時

席を入れ替わって、再会で積もる話に花が咲き、談笑が続いた。八時前、関西支部・浅野会員の万歳でお開きになったが、二次会は席を移して午前一時過ぎまで続いていた。

翌十六日は心配していた天候も比較的よく、七時四十分には登山組が、八時には観光組が宿を後にした。

（三品武彦）

多数が参加した 氷ノ山登山

氷ノ山（一五一〇メートル）は因但山群の主峰である。二〇〇〇メートル未満の山しかない関西にあっては一方の雄であるし、ヒョウノセンという一種特殊な読み方の故に、全国的な知名度も高いように思う。

今回懇談会の会場として鉢伏を選んだ背景には当然、翌日の登山にこの氷ノ山を、の心算があった。

支部懇談会・氷ノ山登山

参加者多数が予想されたので、但馬～因幡の古来の峠道、氷ノ山越よりする（A）と、会場から鉢伏高原の尾根を縦走して行く（B）の二つのコースに分け、登頂後の下山路は同一とする計画にした。（地図参照）

幸い天候にも恵まれ、各位のご協力も得て、万事順調に、予定より早い下山で、無事計画を終えることができた。

遠来の岳友相会して共に山路を歩み、懇親の語らいのうちに、秋の氷ノ山を楽しんでいただけたのであれば、ホスト側として、喜びこれに過ぎるものはない。

【参加者】A－五十八　B－三十八　計九十六名。

（久保三朗）

みどころの多かった 但馬観光

会員の大半が氷ノ山登山班となり、観光参加者は十八名。登山班が出発した後、八時過ぎに観光バスで出発、約一時間後に村岡町、兎和野高原に着く。ここは去る五月に行われた全国植樹祭の会場で、高原の一角にある両陛下お手植えの樹をみた後、木の殿堂に到着。

建築家・安藤忠雄氏設計による国産杉の断面集成材を使用したユニークな建物だ。展望台へ移動して、但馬妙見山から蘇武岳のスカイラインを眺め、次の目的地浜坂町へ向かった。

バスは「夢千代日記」で名をあげた湯村温泉を過ぎ、かすかに海の香りが漂いはじめた頃、浜坂町の加藤文太郎記念館に到着。

最近完成した建物は外観、内部ともに山の形をモチーフにし、吹き抜け空間が多く明るい。その二階に加藤文太郎コーナーが設けられている。

レリーフとともに年譜や登山に使用したスキー、ピッケル、靴、山行記録やルート図、写真などが展示されている。また、山と溪谷社の「孤高の人」連載第一回目の拡大展示には、著者、新田次郎が加藤文太郎を主人公として描く発端となったエピソードの部分が書かれている。最後に北鎌尾根で遭難死した当時を詳細に報道する新聞の拡大コピーを見て、単独行を主体に先進的な山行を行い、三十一歳で駆け抜けた文太郎を偲んだ。

なお、文太郎の生まれ故郷である浜坂町がこの記念館内に彼のコーナーを設ける際、館の内部や資料の展示などには、今回の講師・片山英一氏のご尽力があったと聞いている。

次の目的地へ。松林の端に立つ新田次郎の碑を見て、マリンポーチに着き、日本海を見ながら昼食。

午後は植村直巳冒険館に向かう。浜坂町から八鹿町を経て彼の生まれた日高町に着く。神鍋高原の入り口にある冒険館は一風変わった半地下式の建物で、まず彼の生涯を十五分の映像で見た後、次の展示室では冒険の知恵や技術についての資料、極地用に改良された四重のテント、汗とほこりにまみれた羽毛服や靴、釘を使わず縄のみで組み立てた犬橇、その他探検に使われた用具の数々を見学した。

但馬で生まれた加藤文太郎と植村直巳、それぞれの足跡を偲んで、今回の観光も終わり、一路、終着地の姫路へ向かった。

（阪下悦子）

マカルー東稜に挑む（第三報）

一、隊員紹介－2

前号で藤平隊長以下六名の隊員を紹介しましたが、その後七名の隊員が決定しましたので、紹介します。

◆隊員・田辺治　'87ラブチェ・カン（初登攀）、'90ガッシャーブルムⅡ（登頂）、'91ゴルジェネフスカヤ（登頂）、'91コミュニズム（登頂）、

'91レーニン（登頂）、'93ブロードピーク（登頂）、'93チョー・オユー（登頂）、'93サガルマタ（登頂）'94キャジ・カン（登頂）

◆**隊員・小野岳** '92マッキンリー、'93モンブラン（登頂）

◆**隊員・松原尚之** '85カルポ・ガン（登頂）、'85トランゴI峰 '88メラ・ピーク（登頂）、'89クスム・カングル峰、'92南極大陸（南極点到達）

◆**隊員・谷川太郎** '89ナンガパルバット、'91ブロードピーク（登頂）、'93ガッシャーブルムII峰（登頂）、'93トゥインズ（東峰登頂）

◆**隊員・岡本憲** '90カラコルム マニ・ピーク、'92アイランドピーク（登頂）

◆**隊員・竹内洋岳** シシャパンマ

◆**隊員・荒井俊彦** '91ヨセミテ、'92ヨセミテ、'93マッキンリー

二、実行委員会報告

登山計画の実施機関として実行委員会を設置し、四月十五日に第一回の会合を開催、以来現在まで五回（九月八日）を数え、計画を積極的に推進しています。

委員長＝藤平正夫会長

副委員長＝鴫原啓祐、中村純二

委員＝小倉茂暉、村井龍一、大倉昌身、重廣恒夫、橋本清、堀井昌子、伊丹紹泰、渡辺雄二、片岡泰彦、山本宗彦、相馬勉、大谷亮、山本篤、梶田正人、飯田肇

三、登山隊の準備状況

一九九五年に九十周年を迎えるにあたっての記念行事として、マカルー峰東稜の登山計画を会報五月号に発表、八月号で登山計画の詳細を報告しましたが、その後の準備状況についてお知らせします。

八月中旬に剱岳で隊員候補者によるトレーニング合宿を行い、それを踏まえた上で、現在まで藤平総隊長以下十三名の隊員が決定しました。

九月八日の第五回実行委員会以来、具体的な準備作業については、隊長を中心とした小委員会で進めています。小委員会は現在まで十七回開催され、隊員がそれぞれの役割を担って、東奔西走して準備にあたっています。これまで小委員会では次のような作業を進めてきました。①食糧・雑具の検討立案と寄贈依頼 ②装備の見積りと依頼 ③隊荷の梱包・輸送の計画と費用見積り ④タクティクスの検討 ⑤マカルー峰周辺の気象情報の収集 ⑥パルテンバ・シェルパ氏（在カトマンズ、サーダーの予定）とのシェルパリストの作成 ⑦文部省及び外務省への後援依頼 ⑧スポーツ振興基金の申請準備など、その内容は多岐にわたっていますが、実行委員や隊員のチームワークと、会員の皆様のご支援により順調に進んでいます。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

四、梱包作業

今回の登山に必要な隊荷は総量で約七トンになります。その梱包作業を現在日本通運の晴海埠頭倉庫で行っています。隊員はもとより、会員の皆様や各大学山岳部員のご協力で、食糧のレーション作りや、各キャンプごとの必要装備の分配・梱包が順調に進んでいます。十一月末に作業を終了し、十二月には船積みの予定になっています。

また、登山隊の姿勢として、ヒマラヤの環境保護のために、テイクイン・テイクアウトを実践するため包装の見直しを行い、不必要なものをヒマラヤの峰々に持ち込まないように努力しています。取り外した包装材の総量、また現地でのテイクイン・テイクアウトの実践については、後日報告したいと考えています。

（重廣恒夫）

五、募金委員会

マカルー峰九十周年合同募金委員会が九月十二日に開催され、各委員を中心に積極的な募金活動を推進することになりました。会員の皆様の絶大なご支援をお願いします。

委員長＝藤平正夫

副委員長＝中村純二、小倉茂暉

常任委員＝伊藤敞、今西壽雄、大倉昌身、大森弘一郎、神崎忠男、斎藤惇生、重廣恒夫、鈴木郭之、中川武、西村政晃、橋本清、松浦祥次郎、宮下秀樹、村井龍一、山本宗彦、湯浅道男、吉田宏、吉村健児、渡辺雄二、飯野亨

委員＝野田四郎、松島静吾、中谷充、岡田光行、大橋克也、西郡光昭、中嶋正夫、佐藤一栄、田中弘美、古屋学而、安間荘、高木碕男、木戸繁良、増江俊三、中村義、阿部和行、吉川暢一、梅木秀徳、本田誠也、魚本定良、尾上昇

事務局長＝石橋正美、井野千枝子

●会員募金のお願い

マルカー登山隊の準備も、会員の皆様のご支援により順調に進んでいます。創立九十周年記念事業のひとつとして、十分に目的が果たせるよう鋭意努力中であります。重ねて恐縮に存じますが、募金のご協力もよろしくお願い申し上げます。会員の皆様の熱意あふれるご厚情とご援助を隊員一同、心よりお願いいたす次第です。何卒よろしくお願い申し上げます。

募金振込先

日本山岳会創立90周年記念事業募金

事務局

REPORT 報告 REPORT

探検山行
「氷河を科学する」
科学研究委員会

紅葉の盛りの木曽駒ヶ岳で、氷河地形観察の探検山行を行ったが、それに先立って、有井講師による山岳氷河地形の勉強会を開催した。

●「山岳氷河地形」勉強会

九月二十二日午後六時半より山岳会ルーム・出席者二十名

氷河の分類、山岳氷河は、地球上の全氷河に対して面積で一・三五パーセント、氷の量で〇・一二パーセントにすぎないこと。山岳氷河の地形による分類、わが国の氷河遺跡は約五万年前のものであること。北米やヨーロッパの広大な地域が氷河遺跡からなっていることを学んだ。

●「探検山行」参加者二十五名

十月一日(土)

しらび平からロープウエーで上がる途中、二〇〇〇メートルから上のあたりは全山紅葉。時折日がさし美しく輝くが、天狗荘に入る頃はすっかりガスになった。前夜宿泊組や早朝出発組が、三の沢岳や本岳を散策して小屋に戻ってきた。伊那前岳を往復する組もいた。

十六時三十分、ほぼ全員がそろったところで有井講師から、木曽山脈が大逆断層により形成されたことや、木曽駒のカール地形、黒川渓谷を中心とした氷食による開かれたU字谷について、氷河遺跡はしらび平のロープウエー乗り場付近（一六〇〇メートル）にまでみられることを学んだ。

紅葉の盛りの濃ケ池畔で昼食

夕食後は盛大な懇親会が開かれた。

十月二日(日)

早朝に起床、宝剣山頂でご来光を迎える。昨日とは打って変わった晴天。鎖場の途中に断層面が露出していることを教えられ、手で触れるとツルツルする。朝食をすませ、六時半出発。中岳から本岳を経て馬の背へ。途中断層露出面の岩肌や、黒川の開かれたU字谷地形、濃ヶ池のカール地形を観察して濃ヶ池のカールに下る。昼食後、大関カール（駒飼ノ池）では氷河活動により堆積した岩と、地盤を形成している岩との区別を学ぶ。

宝剣山荘に戻り、いったん解散し、帰りを急ぐ組、縦走組と別れ、紅葉の観光客ですれ違いもままならない大混雑の中を千畳敷に下った。ロープウエーの乗り場の前で、中村副会長の撮ってきたアルプスの氷河写真を参考にしながら、最後の講義を聞き、氷河時代の宝剣岳の姿を思い浮かべつつ解散。一時間近くロープウエーを待って、それぞれ帰途についた。（北野忠彦）

平成六年度上半期
新入会員の集い
総務委員会

十月二十二日(土)午後二時から日本山岳会集会室において、平成六年度上半期入会者のガイダンス「新入会員の集い」が開かれた。

対象となったのは、本年三月から九月までに入会した百五十八名（復活会員を除く）、そのうち参加者は三十四名であった。

小倉常務理事の開会の辞に続き、藤平正夫会長の歓迎の言葉――立山での星座観察の話から始まり、国内並びに海外遠征のエピソード、そして何よりも自然を大切にしたい――は参加した新入会員に大きな感銘を与えた。

中川総務担当理事による山岳会の組織と活動の説明の中では「山岳会が何かをしてくれるのではなく、あなたが山岳会に何ができるかを考えて欲しい」との言葉が印象的であった。

各委員会、同好会の案内の後、前年度入会者の同期会「ジャック93」の幹事から、設立から現在までの活動報告があった。

小憩の後、椅子を円形にし、新入会員の自己紹介を兼ねた一分スピーチが中村委員によって進められた。各自山への想いや山岳会への期待などを披露してくれた。

林委員により図書室の案内及び利用についての説明の後、会場を一〇四会議室に移して懇親会を行った。

新入会員を代表し、関西支部所属の

自然保護随想

静かな山

塚本珪一

たしか以前私はこの欄に、春の栂池で読書をしようと登ったとき、スキー客を運ぶヘリコプターが騒々しくて、酒盛りをやってしまった話を書いた。

一九九四年八月の終わりの徳沢園でも同じようなことで不愉快になった。今度はどこかの大学のワンゲルである。

徳沢園には昼前に着いてテントを張り、草の上に寝転んで昼寝をしていたのであるが、かけ声勇ましく山のほうから降りてきた一群があった。最初は自衛隊の演習かと思ったが学生であった。

たぶん「行動は敏速に声を出してやれ」という指令の元に動くのだから、こちらも昼寝どころではない。どた靴でどたどた走り回り、かけ声を出して前世紀の遺物のようなテントを張り始める。こちらも黙っていることはないと文句を言いに一人が行き、少しはましになったが、相変わらずどたどたと走り回る。

世の中変わったのだろう。昔、私たちも四分間で家型テントを張るといった、国体登山をやっていたこともあるから、あまり人のことを言えないかもしれない。まあ、国体登山はその後の反省もあって衰退の一途をたどっている。

ワンゲルを見ているとやっぱり、今の若い者には競技や軍事行動の訓練が必要なのかなと思う。まあ、ともかく前穂高の美しい空間も彼ら、彼女らのために崩壊した。

今回の私たちの徳沢の計画はエコ・ツーリズムが登山にも可能であるかが目的であったが、話題はもっぱら「あいつらいったいなんや」ということで論議することになった。

私たちは「岩小屋の中で小さな火を囲んで山を語る」大島亮吉の世界を考えている古い世代なのだろう。

その夜、私たちは「ほろよいトーク」の時間をもって、ランプを囲みながら環境問題と登山を語り合ったのである。

人に自然にやさしい登山こそが二十一世紀的な登山であるはずである。

＊

「静かな山」たしかそんな言葉もあったようだ。

島田實会員の乾杯の後、約一時間なごやかなパーティーが続いた。中にはこの期をとらえ、藤平会長に直訴（？）の手紙を持参した新入会員もあり、懇親会は大いに盛り上がった。

最後に南川理事から年報『山岳』の話に続き、閉会の辞があり、午後七時半「新入会員の集い」はお開きとなった。

（袴田通隆）

第三十六回有志閑談会

小石川後楽園・涵徳亭で開催される

第三十六回有志閑談会が十月二十三日、小石川後楽園・涵徳亭で開かれた。当日、本部での新入会員オリエンテーションと重なったため、会長、副会長の出席はなかったものの、有志十六名がこの会に集った。

まず、佐々保雄元会長・名誉会員が「日本山岳会の今後いっそうの隆盛と皆さんの健康を願って」と乾杯音頭をとり、会食に入った。

「閑談」とは、㈠静かに物語ること。㈡むかしばなし。（三省堂広辞林）とあるが、その「閑談」の一部要旨を紹介すると

「五十歳記念に入会させてもらった」

「アルパインスキークラブなど三つの任意団体に入っているが、日本山岳会に迷惑をかけてはいけないと、非常に気を使う。昔はこういうことはなかった」

「九十周年とか、政治絡みの話はなるべくしないほうがいいのではないか」

「日本山岳会何するものぞ、となかなか入会しなかった。多くの先輩と出会い、入ってよかったと思っているが、今でも会のやり方には疑問」

「一九六九年の学生運動華やかなりし頃、某氏と間違えられ、大学生が紛争している時に何ごとか、と週刊誌の取材を受けた」

などなど。

会食を終わって庭園を散策、解散となる。

今回の世話人は南井英弘さんと武田満子さん。ご苦労さまでした。

（高田眞哉）

次代に残そう美しい山と渓

（第三種郵便物認可）山 595-1994・12・20

JAC 支部だより

全国各地の支部から，独自の活動状況をリポートします。

石川支部

北陸三支部合同登山 奈良岳・奥三方山

富山、福井、石川の第三回合同登山は、石川支部の担当で、金沢に流れ込む犀川の源流、奈良岳（一六四四・三メートル）で実施した。

十月二十九日の夕方、河内村国民保養センターに二十五名が集合。お土産の地酒と趣向を凝らした山菜料理で、盛大に乾杯。

三十日、よく冷え込んだが、素晴らしい快晴に恵まれた中、福井から四名が合流して出発した。奥池林道から車で登山口へ入る。この林道は整備されておらず、落石や崩壊が多く、見下ろせば直海谷に吸い込まれそうな道である。林道終点からしばらく丸太の階段を登る。ここから三十分ほどの登りがきつい。昨夜の美酒が一度に汗となる。このあたりは立派なブナの原生林で、直径三メートルを超えるものもあり、素晴らしい黄葉の樹林帯である。「ブナ茶屋跡」まで一汗かくと道もやや緩やかになり、主稜線の右側を巻くように登る。いったん下り、最低鞍部までくると、直海谷と犀川上流の二又川の分水嶺である。秘境犀滝へ降りる分岐からは、真正面に高三郎山が錦絵のように美しい。さらに稜線をたどると、一四〇〇メートルあたりから樹々は落葉し、ようやく奈良岳と奥三方山の分岐にさしかかる。

当初の計画ではここから奥三方山へ向かう予定であったが、本日は快晴無風、時間も早いので、皆の足はさらに高みを目指し、ほぼ全員奈良岳山頂で至福の時を過ごすことができた。三等三角点のある山頂からは、遠く立山連峰、目の前の笠を広げた大笠山、その奥に白山が聳え立つ。

帰路、奥三方山（一六〇一メートル）にも立ち寄る。分岐点より二十分ほどである。奈良岳山頂では大笠山のかげに隠れていた笈ヶ岳（一八四一・四メートル）が姿を現した。見上げる峰は墨色の冬支度。見下ろす山は紅を競い、この時節にしては暖かく穏やかな一日に感謝し、次回の合同登山を約しつつ山を下りた。

［参加者］富山支部・七名、福井支部八名、石川支部・十四名　計二十九名

（中川博人）

29名の参加者が河内村国民保養センターに勢ぞろい

宮崎支部

宮崎ウエストン祭覚書 十年の節目に思う…

■ウエストンと祖母山

かの山に楚々と咲きたるりんどうの花むらさきの翳（かげ）り恋しき

崩野（くえの）トンネルを抜けると、メルヘンの世界を彷彿させるパノラマが目に飛び込んでくる。祖母山を中天に立たせ、筒ヶ岳を先兵にした、なだらかな丘陵の原野が目前に迫る。標高八〇〇メートル。ここ三秀台は、盆地性高原の起伏する高台にある。

十一月三日文化の日、晩秋の風が肌に心地好く触れるなか、第十回宮崎ウエストン祭はこの三秀台で開かれた。祖母・阿蘇・九重の秀でた三山が一望できることから三秀台といい、また日向・肥後・豊後の三国が眺望できるという意味から三州台とも名付けられている。

今から二十八年前、この三秀台にウエストン碑は建立された。碑は、昭和

海外の山

ウクライナ人の「フジヤマ」

江本嘉伸

「ウクライナ」とは「クライ（はずれ、辺境）」に位置する国、というような意味だ。カラパチア山脈の西、黒海に臨む人口五千三百万のこの国は、国土が六〇万平方メートルと、隣のロシアの二十八分の一しかない（それでも日本の一・六倍だ）。

経済悪化に悩むこのスラブの国に一九九二年、登山家たちの新しいグループが誕生した。

名を『諸大陸の頂』という。

石油精製を仕事とする四十七歳の会長、ニコライ・スリジクは語る。

「地球の各大陸の最高峰にウクライナの自由の旗を立てたい、という思いからの命名です。世界の人々はウクライナのことをまだあまり知りません。登山を通じて、私たちの国を少しでも知ってほしい、という気持ちなんです」

旧ソ連時代に「スポーツ・マスター」の称号を得た学者、技術者、会社経営者などさまざまな仕事を持つ登山家たちが、〝ウクライナ魂〟のもとに集まった。手始めとして、九三年、「オリンピック百年を記念して」ギリシアの最高峰、オリンポス山（二九一七メートル）に登った。

そして、次の目標が、「二十一世紀を象徴する国」日本となった。

「あの有名なフジヤマに登り、できれば日本の実業家たちと会って交流したい」と、『諸大陸の頂』のメンバーたちは考えた。問題は、高い渡航費、滞在費だ。

経済危機のウクライナでも、実績をあげている企業はある。石油精製会社、商社、電信会社、花の装飾専門会社などの四つの企業が「意気に感じて」スポンサーを引き受けた。

時間と金の節約のため滞在できるのは一週間が限度だ。それでも、二度と行くことはないかもしれない国での登山である。「フジ」とウクライナ語で縫い取りした記念のペナントまで用意したが、ビザ取得に時間がかかり、スリジク会長以下九人のメンバーが日本に到着したのは、はじめの予定より三か月遅れた十一月二十四日だった。

渡航手続き上、経済交流を主としたものにする必要があったのか、代表団の名は「ASSO－UNICHI（アジア太平洋諸国市場向けハイテク商品、サービス、ウクライナ協会）」という長ったらしいもので、団員リストも「協同組合代表」「銀行マネージャー」「科学アカデミー電気力学研究所研究員」などとなっていた。だから、日本での受入れ機関である、日本対外文化協会（対文協、旧ソ連圏の文化交流に実績を持つ）も当初は、ウクライナ人たちが富士山に登ることを最大の目的としていることはわからなかったほどだ。

ウクライナのメンバーの一人がクリミアの岩登りで知り合った、という縁で日本山岳協会の登山家たちが急遽駆けつけ、大慌てでサポートに走り回った。

かくして十一月二十五日夜から二十六日にかけて、女性を除く八人が、日本の登山家たちと富士山をめざした。幸い全員が登頂し、無事下山、支援者たちをほっとさせた。

「目標の富士山に登れて本当に嬉しい」「風が強く、凍っていたけれど、全員登頂できたので大満足です」ウクライナの山男たちは、口々にそう語り、三十日朝帰国した。

仕事の話はほとんどできなかったが、彼らの「フジヤマ登頂」は、故国で経済困難の中の明るいニュースとして報じられることだろう。

四十年「祖母・傾国定公園」指定を記念し、地元高千穂町を中心に県内外の有志と岳人から浄財を募り、同四十一年十月六日に完成した。同年十一月六日（ウエストン師祖母登山の日）に除幕式が行われ、英国大使館からメッセージもおくられた。当時は、予算の都合で洋鐘がなかった。そこで、地元山岳会を中心に県内外の有志と岳人の協力で鋳造された。同四十七年五月二日、祖母山の山開きに合わせ、懸鐘式が行われ、名実ともに碑の完成を見たのである。

碑建立の意とするところは、国定公園指定記念もさることながら、ウォルター・ウエストン牧師（英・一八六一～一九四〇）が、北アルプス登山の前年である明治二十三年十一月六日に五ヶ所から祖母山に登った史実も大きなウエイトを占めていた。

ウエストン師（以下「ウ師」とする）は、日本山岳会名誉会員第一号（日本山岳会入会は一九一〇年三月一日・会員番号二四九）である。

日本近代登山の父と呼ばれ、世界に日本アルプスを紹介した登山者としての遺徳をしのび、足跡を後世に伝えようという願いもまた、込められている。

さて、五ヶ所の旧家、矢津田鷹太郎翁の明治二十三年十一月六日の日記の原文を抜粋紹介したい。

「六日晴天英人ジョン・ブランドダウン君及神戸在留同国人ウエストン師同道ニテ祖母嶽登山往復共立寄ラルー河内泊ノ由シ」

この日記の記述から、ウ師の祖母山登山が確認された。

碑は高さ八メートルのコンクリート製逆L型。当初、上部に風車を仕込んで高原をわたる風で鐘を鳴らす仕組みだった。台座の下に、ウ師の生誕地英国から庭石（ヨークシャ石／幅三〇センチ、高さ一八センチ）を恵贈いただき埋められている。

ウ師の横向きのレリーフは、祖母山をいつも優しく見つめている。そのレリーフの下に、前記の矢津田翁の自筆の日記が大理石に刻まれている。

■ウエストン師の人間愛

今、日本で「ウエストン祭」は七か所で開かれている（上高地・長野県／広河原・山梨県／親不知・新潟県／堀金村・長野県／高千穂町・宮崎県／新郷村・青森県／飯田市・長野県）。

上高地のウエストン祭は歴史と伝統があり、今年六月五日、四十八回を重ねた。新しく開かれたのは「青森ウエストン祭」。本年五月二十八日第三回目が行われた。青森ウエストン祭は他の五か所のウ師顕彰とは少し趣が違う。

明治三十五年、青森大凶作のときにウ師が代表者となり現地調査に赴き飢饉救済活動を行った。凶作の悲惨さと、国境を越えたウ師の人間愛と慈愛に感謝しよう、後世にその真実を伝えようという青森県三戸郡新郷村の村民一人ひとりの思いが、他に類を見ない謝恩碑と顕彰碑の実現を見たのである。

■いつもディスカバーふるさと

日本山岳会宮崎支部発足は昭和六十年七月十五日。今西錦司元日本山岳会会長（文化勲章受賞者）の強い要望から結成された。生態学研究を本県都井岬に選ばれ、戦後の一時期を過ごされて宮崎の山々を歩かれた。

私たちは、宮崎支部発足と同時に三つの目標を立てた。

●宮崎ウエストン祭開催
●宮崎百山選定登山と百山小冊子刊行
●諸塚山山開き（森林文化賞受賞記念）

である。

言い古されたキャッチフレーズである「ディスカバーふるさと」。この一点に心を寄せ合い、誕生したのが宮崎支部の原点でもある。

十年一昔。第一回宮崎ウエストン祭は、五里霧中のなか試行錯誤を重ねた手作りのイベントだった。参加者六十余人。

第二回目は「日本山岳会九州山の集い '86みやざき」の集いをかねて開かれた。西堀榮三郎、今西壽雄元会長、山田二郎前会長、大塚博美前副会長、東京在住会員、静岡、関西、山陰、九州四支部から多くの参加があった。

今は亡き西堀榮三郎先生の二時間五分にわたる特別講演「自然と人間」が今、鮮明によみがえる。

第六回目（平成二年十一月三日）は、ウ師祖母登山百周年、高千穂町制七十周年記念祭となった。

碑建立と宮崎ウエストン祭になみなみならぬご理解とご努力いただいた甲斐畩常前高千穂町長名で碑の反響板の裏側に碑の経緯を記した石板が完成披露された。一年ごとの開催とはいえ、小さな発想で大きな行事を、経費は最小限に、一人でも多くの参加をと願いつつ地域の人たちと祭りを盛り上げた。

地方の時代と呼ばれて久しい。過疎が続く地域の活性化に少しでも役立とう。山麓に公害ならぬ人害をもたらせてはならない。山に登っている私たちの願いは、山麓での地域の人たちとの感謝を含めた出会いと交流の実践が第一義的な心情である。

年ごとの再会でウエストン碑を囲みまた、早春の諸塚山のブナを眺め地域の人たちと語り合う。膝を交えた公民館の一夜の語らいの弾みは楽しく、たとえようがない。なかでも、第六回目から参加している地元五ヶ所小学校全児童の姿は、ウ師もどれほどか力強く嬉しく思われることか……。ウエストン碑献花、献鐘する子供たちの姿を見たとき、ウ師の遺徳は二十一世紀に引き継がれてゆくことを目の当たりにした。前夜祭での児童のコーラス、夜神楽も楽しい。目を輝かせながら、小さな口を一杯に広げて歌う。太鼓に合わせながら踊る夜神楽での真剣なまなざしに思わず感動し涙した。

どんなイベントでも回を重ねると尻すぼみする。だが、「新神々の里づくり」に躍起の稲葉茂生高千穂町長と、町民一人ひとりの熱烈な郷土愛が大きな原動力となってウエストン祭は続けられている。（二百五十人余が参加）

＊

今回十回目を記念し、中村純二日本山岳会副会長ご夫妻を迎えて、'94日本山岳会九州四支部（福岡・熊本・東九州・宮崎）合同祖母山行・懇談の集い・宮崎支部創立十周年の集いも兼ねて行われた。九州在住の日本山岳会会員七十三名が一堂に会したことは意義深い。

願わくは、ここ三秀台の風光がいついつまでもこのままの姿であってほしい。ウ師の人間愛と自然愛を、一人でも多くの人たちに語りかけたい。

神話の里に栄光あれ!!。

月さえて祖母山照らす十五夜の
ひかりやさしく稜線ひく

（大谷　優）

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。

カット　中村あや

ブラバンド名誉会員を訪ねて

今西壽雄

四年前シャモニーで、人類初の八千メートル峰・アンナプルナ登頂四十周年記念のお祝いの催しがありました。日下田実君、田部井淳子さん、上田豊君とともにシャモニー市長の招待を受けて、世界の登山家たちと楽しい時を過ごし、アルプスを初めて見聞しました。

本年八月、機会があってはじめてスイスへ参りました。大腿骨を痛めておりますので長歩きはできませんが、登山電車とロープウェイを利用してアルプスを瞥見してきました。

サミュエル・ブラバンド氏はどうしておられるのだろうかと気になっていたので、グリンデルワルドで山案内人に聞いてみました。元気にしておられるとのことでしたので、お宅を訪問いたしました。

アイガーを見晴らすお宅でブラバンド夫妻と今西会員

アイガーが目の前に聳える牧草地に素晴らしい山小屋風のお宅がポツンと建っていて、タクシーが案内してくれました。部屋は小綺麗に整頓されていて、気持ちよく迎えてくれました。

ブラバンド氏は行を共にしたことのある日本の登山家の名前をあげて、その人たちを想い出しておられるようでした。九十六歳になったそうですが元気そのもの。私が日本山岳会の会長のとき、ブラバンド氏を名誉会員に推薦したのをすっかり忘れていましたが、彼は「日本山岳会の名誉会員に推されて光栄であります」とお礼を言われたのを印象深く聞きました。彼の胸には、名誉会員バッチがつけられていました。

記念写真を撮ってから、お宅を辞しました。

改装されたJACの静かなルーム

坂倉登喜子

去る九月三日、かねて改装中のルームができあがって、オープンパーティーがビールパーティーと同時に開催された。私は同日、恒例の上高地山研で毎年催される三水会の懇親会に参加し、初秋の上高地、乗鞍周辺を歩いていたので、出席できなかった。

しばらく行かなかった土曜会に、九月十日、久しぶりにでかけた。ルームに足を踏み入れ、立派にリフォームされたのに驚き、これなら外国の登山家が来室されてもよいと思った。今まで応接室のソファの後ろには、たくさんの段ボール箱などが積んであり、ルームらしくなかったからだ。資料を置く戸棚も、入れる倉庫もなかったのだから、仕方なく荷物の置けるところが応接室だったのだ。

かつてカナダ山岳会のルームを訪ねたことがある。さすが、と思ったのは、ルームは広々としており、宿泊できる部屋も炊事室も完備していて、登山に訪れた会員が泊まれるようになっていたことである。

今度は奥の一〇四号室が小集会室となっていて、土曜会が右側の部屋を使えるようになった。非常に静かで、これならゆっくりできると思えた。

当日は織内さん、内藤さん、古い会員の川越夫妻もみえていて、昔話に花が咲き、懐かしかった。こんなによい部屋ができたのだからまた集まろう、と話が合った。日本山岳会には中高年になった会員がたくさんいらっしゃると思うので、毎月第二土曜日には山の思い出話を語り合って、楽しい懇談会をしたいと思う。皆さんで年四回くらい、中高年向きの安全登山を計画し※

カット　宇都木慎一

俳句

大杉谷

小林碧郎

雷霽れて雲の遙かに熊野灘
鹿の子の涼しき眼ありさるをがせ
栂溟き奈落を滝のひかり打つ
宮川のはじまる滝ぞ栂の中
負荷緊め縋る鉄鎖や岩煙草
血膨れし山蛭撲つて岩穢す
霧裂きてとどろく滝の七ツ釜
谷底の一つ灯遠し夕河鹿
千尋の滝簾なす山毛欅のそら
あまご釣荒瀬の虹を追ひゆけり
郭公や杣の操る湖わたし
ひぐらしや老杉祀る峡の村

※て、年齢にふさわしい山歩きを心がけ、自然との出会いにより、心豊かな思い出を残したいと念願している。

コーカサス・ヒマラヤを行く

中垣淑子

一九九四年八月から九月にかけて、中央コーカサスの中でも五〇〇〇メートル級の山、五座がひしめくコーカサス・ヒマラヤをトレッキングしてきた。

標高二二五〇メートルのベゼンギキャンプを基地に、無人の山小屋に泊まりながら歩く。ベゼンギキャンプからはウルルアウズナ（四六八一メートル）カシュタンタウ（五一五二メートル）、魔女という意味のギェストラ（四八五九メートル）がよく眺められた。

氷河を溯って行くと、ギェストラに始まりカティンタウ（四九八六メートル）、グルジアの詩人の名を冠したショタ・ルスタベリ（四八五九メートル）、優美な双耳峰のジャンギタウ西峰（五〇五八メートル）とジャンギタウ東峰（五〇三三メートル）。そしてジャンギコシュの小屋までくるとシュハラ（五〇六八メートル）に向かい合う。これらの雪と岩と氷の壁はベゼンギの壁と呼ばれ、幾多のクライマーが命を落としている。途中のミシスコシュの小屋の近くの岩には遭難者の名前や姿を打ち出した金属板が取り付けてある。ドイツ人、ポーランド人、チェコ人のもあった。

晴れた日のベゼンギの壁は絢爛豪華だが、雪崩の轟音をたびたび聞いた。

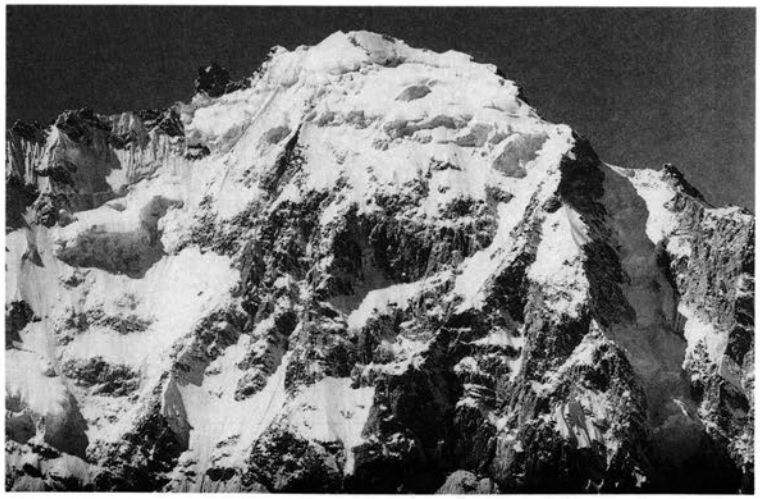
チョプリイ・ウーゴル（暖かい隅）と呼ばれるところにあるウキューコシュの小屋からはディフタウ（五二〇四メートル）や南アルプスのようなムソスタウ（四一一〇メートル）が見事だった。小屋の近くには格好の岩場があるのも魅力だ。

アイベックスが多く、小屋の側にも家族連れで現れる。人間を恐れず、子連れでも平気で近くまでくる。山に入る人が少ないからであろう。

無人小屋はどこもきちんと片づいており、非常食もあってロシアのクライマーのマナーのよさを伺わせた。

トレッキングを終えて戻ってくるベゼンギキャンプは、四十年の歴史をもつ。百人は収容できるが、私たちが利用した二階建てのロッジには各部屋ごとに清潔なベッド、水洗トイレ、温水シャワーがあり、快適だった。キャンプの中央には食堂がある。キャンプ用品の貸し出しや食料品の販売もしているので、しごく便利である。

帰りはキャンプから峠越えをし、チェゲムの村でヒッチハイクをしようと座り込んでいたら、老婦人からゆでたじゃがいもと牛肉の塊、揚げパンの豪華な昼食をいただいた。また、バケツ一杯のリンゴや、作りた



コーカサス・ヒマラヤの秀峰ディフタウ（5204）m

短歌

ぬくもりの岩

大橋克也

秋つ山の紅葉を脱ぎし渓合にて
若き仲間の手をかりて攀ず

秋の陽を斜めに浴びし岩溝の
陰影ありて胸壁映ゆる

枯れ葉踏み獣の如く攀りきて
日向の岩に頬あててみる

とんぼ並ぶぬくもりの岩に息をつく
落葉留めぬ傾きなれど

いま一歩壁に阻まれ頂を
踏まぬ思いの帰路の秋色

詩

五彩の雲

塔田也寿

山は微笑む
山巓の五彩の雲に目醒めるとき
山は叫ぶ
迸る雲の噴射に
山は吼える
朔風氷をもって頬を打つとき
低く低く山は歌う
人間どもの踏み去ったあと
その谷に深く朽ちた屍に

ての凝乳をいただいたりした。どうしても泊まってほしいとキャンプの従業員の実家に招待され、大歓迎を受けた。お土産までいただいて、コーカサスの山と、思いがけない人情のよさを満喫したが、これも私一人と気のあったガイド一人との気楽なトレッキングだったからできたことなのかもしれない。

山と自然の断章(11)

岡本治信

■「友情」の嶮路

旧制一高で寮生活をしていた頃、友人と二人で三ツ峠山を目指したことがある。二人の間で「友情」について意見が対立し、それに決着をつけるための山行だった。早朝、笹子の駅から歩き出したが、清八峠を越すあたりから雨になった。二人は不案内な山道を歩きながら議論をぶつけあい、共に疑い悩み、傷ついては慰めあって友情の本質を解明しようと懸命になっていた。

雨が激しいので、三ツ峠の頂上をあきらめて登山道から左へ険阻な踏み跡に入った。急峻な難路を這うようにして、長時間の危険と不安をいやというほど味わい、かろうじて山裾まで下りついた。心身共に疲れきって、山がいかに大きく強く深いか、人間がいかに弱く小さく頼りないかを痛感し、二人は自然の威力の前にいうべき言葉もなかった。

友情の問題については何の解決も得られなかったが、このときの体験は生涯の貴重な教訓となった。私の最も尊敬し信頼していたその親友は、学校を去ってからは会う機会もないままフィリピンのレイテ島で戦死を遂げた。

■烏の知恵

北海道の駒ヶ岳（渡島富士）への登山路は、麓の樹林帯を抜けたあとは一本の立木もない茶褐色の山体を一気に頂上近くのプラトーまで登りつめる。火山礫の堆積原に腰を下ろして大沼の美景をぼんやり眺めていると、すぐ横に一羽のカラスが舞い降りて餌を欲しがる風情だ。

持っていた「おのろけ豆」を一つ投げてやると、すぐ拾って平らな石の上に置き、嘴で突いて殻を割り、中のピーナッツを取り出し、口の中で転がすようにして食べ、落とした殻もていねいに拾って食べた。もう一つ投げてやると、石の間に落ち込んでしまった。カラスはそこの石を三つ、四つ懸命にくわえて脇にどけ、豆を取り出すと今度は中身を調べずに呑み込んだ。ついで面白くなって三つ目を投げたら、カラスの体に当たりそうになった。彼は軽く羽ばたきをしてうまく逃げながら、その反動で素早く豆をつかまえて、丸呑みにした。その身のこなし、とくに食べ物に対する巧みな処置は「お見事」という他はない。

＊

駒ヶ岳でカラスの生態に興味をひかれたことから、こんなことを思った。

わが国ではその昔、八咫烏が天照大神の使者として東征軍の道案内を勤めたという神話がある一方、中国の揚子江の沿岸地方では今でもカラスは舟運の安全を司どると信じられている。山でカラスに会えば道に迷わないとの言い伝えも、これらと同じように根拠があるのであろう。

字づらだけ見れば烏は烏の中で一本足りないけれども、真っ黒で可愛げのない体形や押しつぶしたような鳴き声で損をしているのは気の毒だ。日本の童謡にも「お手々つないでみな帰ろう、カラスと一緒に帰りましょう」とか「カラスは山に可愛い七つの子があるからよ、行ってみてごらん、まあるい目をしたよい子だよ」などとも歌われて、子供たちには結構親しまれている。

何ごとでも悪い面があれば必ずよい面もある。いっぱしの岳人ならば、カラスの頭のよさ、道案内をする先見性も認めてやって、ふだんから仲良くしていれば、いつかは命を救われることだってあるかもしれない。

続報二つ
『四松庵』山の会での寄せ書き

開発秀三

「山」五八七号でご報告しました標題の寄せ書きの二枚目が発見されました。これは、お膝元ともいうべき資料委員会の保存資料の中で眠っていたものです。現在、改装後ルームに新設されたラウンジのショーウインドーの中に展示されています。

この寄せ書きの裏面には、「四十三年、四松庵の山の会の席上のもの、小島烏水『山の風流使者』参照。当時の出席者創期会員・川島祿郎氏より寄贈されたり　藤島」とメモが書かれています。この発見を連絡した近藤信行さんからのお葉書によりますと、「昭和四十八年『近代登山の先駆者展』のとき藤島さんからお預かりしたものと記憶しておりました」と書いておられます。

さて、今回発見したものには、前回のものに署名されておられなかった方のものが見られます。①SHIGETAKA SHIGA ②志賀富士男　③蝶の絵とモンシロチョウの学名　④山の坊　⑤蘭堂？の印です。

①志賀重昂さんのローマ字のサインについては、川村宏さんからこのように読めるとのご連絡を受け、さらにご遺族（お孫さん）の戸田博子さんが私家本として刊行され、恵与いただいた「生誕百三十年記念誌　志賀重昂」の表紙カバーにある重昂さんの英文原稿の筆跡と一致（とくにGの字の筆法が）していることが確認できました。②の志賀富士男さんについては烏水さんの文章の中で描写されています。

③以下については前回同様、謎解きの作業となります。③は三井嘉男さんから「高野鷹蔵であろう」との推定を受けました。烏水さんの文章による当日の出席者の中には、中村清太郎さん、武田久吉さんと、当時、高山蝶に熱中していたことが判っている人も含まれているのですが、モンシロチョウは高野さんだろうとのご意見です。

④については全く見当もつきません。柳田国男さんの筆跡と似通った字体との意見も聞きます。山の坊は地名としては、現在の糸魚川市の一部と蔵王の近辺の二か所にあります。しかし、柳田国男さんの著作から直接山の坊とのつながりを示す文章は発見できません。出席者の誰かに山の坊と仇名で呼ばれた人がいたのでしょうか。

⑤蘭堂？の印は、KKと一体と見られるので木村鑛吉さんでしょうか。（字が正確に読めないのが残念です）

前回に引き続き解明できないサインが残ってしまいました。

なお、左上端のM. SHIRAIは白井光太郎さんでしょうが、ミツタロウと自称していたことがあるのでしょうか。どの人名辞典でも、しらいこうたろう、と読ませていますが……。

ウエストンが寄贈した写真

一九九三年十一月号（五八二号）で、ウエストンが英国王立地学協会に寄贈した日本の風景写真二十六葉のうち、明治二十四年の濃尾大地震関係のものが六葉含まれていることを報告しました。そのうちの四葉の写真は今まで日本国内で未発見のものであったことが、岐阜大学名誉教授・村松育栄さんによって確認されました。（七月五日付岐阜新聞朝刊）

そしてこの記事をきっかけとして、震源地であった岐阜県本巣郡根尾村の教育委員会が英国王立地学協会からリプリント写真を取り寄せ、同村、水鳥（みどり）にある根尾谷地震断層観察館に展示されることになったと九月七日付の岐阜新聞が報道しました。

このような形で、ウエストンの寄贈した写真が日本に里帰りをして、地元の人が大切にしていることを知り、人生の因縁の深さを、つくづくと思いました。

神より恵み給うたコンデ・リの頂

宮沢美渚子

五年ほど前から六十歳の六〇〇〇メートル峰記念登山を考えていた。それを思い立った理由の一つに、老いてますます充実した人生を、ということ。最近高齢者の痴呆が多くなっているということから、ぼけを防ぐ上でも、できるだけ若者に頼らず、高齢者だけで未知へ挑戦し、自分の力で成し遂げよ

うという啓蒙をなげかけたかった。

ツアーパックにのって何もかも人任せではなく、面倒な書類の作成や現地との交渉も自分達で行うということも目的の一つだった。これからは高齢者も、お金さえ払い込めば連れていってもらえるもの、という観念から脱却し、自ら企画し、自分の手でサクセスをもたらしたいと願うものである。

＊

そして五年の思い入れを果たす時がきた。

九月二十八日、六十一歳の誕生日に、キャラバン開始から十日目でC3に達した。そこはトップまで目前に約二〇〇余メートルの雪壁を残すのみだった。

山巓は神々しく輝き、雪原の中のテント場は、ここは浄土か、と思わせる光景だった。サーダーがトップを指し、バースデープレゼント、と言ってにっこり笑った。私は登頂を確信したものの最後まで慎重を期し、祈った。

靴を脱ぐのも、ズボンを上げ下げするのも気だるい。C3の夜は、明日のために酸素を十分間摂取し、快い眠りについた。

九月二十九日、雲なく、風なく、氷河のクレバスは青く光り、雪壁の白い輝き、このまぶしさの中にサクセスを確信した。白き神々の座より、この好天を恵み給うたこと。摩訶不思議なる別天の空間にある心地だった。

七時半、テントに日照の一筋をいただき、緊張に満ちた出発の朝。サーダーのリードで、フィックスロープを伝って、ユマール登行に入る。山頂につながっているこの一本のフィックスロープを頼る以外、トップへのルートはない。私の歩幅が狭く、シェルパが先につけたトレースに足が届かない。新しい雪面に、懸命にアイゼンの爪を蹴り込む。呼吸が荒くなり、なかなかピッチが上がらない。

十時二十五分、ナイフリッジ状の頂上へ攀じ登ると、足元はすっぽり切れ落ちた絶壁で、眼下はるかに小さくナムチェ方面が点々と見え、正面はエベレスト山群の圧巻である。サガルマタの頭にも雲はない。ヒマラヤにこのような天気が存在するのだろうか。世界の最高峰群が、私へ祝福のエールを送ってくれているように思えた。

その時登頂の感激はまだなかった。写真を撮るため移動したくても、サーダーにしがみついていなければ転落しそうなスペースで、自分を見つめる余裕がない。寒さはなく、思う存分視界を堪能し、一気にC1へ下降する。

C3の五八〇〇メートルに比べれば、C1は五〇〇〇メートル以上とはいえ気楽なものだった。夜中のトイレはとてもつらいが、その夜のゆばりの気持ちよさは格別で、仰いで見た下弦の月は不気味な美しさだった。

帰路のキャラバンは垂れこめた雲の下。ルクラへ下山した夜、身も心も極まって湧きあふれる涙が火傷状態の日焼けの頬にしみた。その夜はなかなか寝つかれず、登頂の実感が込み上げ、シュラフをかぶって忍び泣いた。できれば、天に向かって思い切り声を上げて泣き叫びたかった。それは、還暦を超え、六〇〇〇メートルを果たした、言葉では言い尽くせない自分自身を称える感動のほとばしりであろうか。

（コンデ・リ南峰は地図上六一八七メートルとなっているが実際は六〇一一メートル）

山と医療・長尾悌夫

凍傷について

身体髪膚これを父母に受く，あえて毀傷せざるは孝の始めなり

毎年冬山シーズンが近づくと、今年こそはクライマーの凍傷を診ないですむようにと祈りたいような気持ちになる。仲間の手指、足指を切断するのは身を切られるようにつらいことだ。

凍傷の病態は二つに分けられる。一つは組織が凍結することで、細胞が破壊されること、もう一つは血管に対する寒冷の影響で、血管が収縮するうえに血液がソフトアイスのように泥状化して血栓ができ、血管がつまって末梢に血液が流れず、組織は酸素の供給を受けることができなくなって壊死することである。手指の場合は環指（くすり指）、小指に多く、足指は全指が大体同程度に罹患する。

現場で罹患に気づいたら、速やかに40℃前後の湯の中に患部を入れて凍結を融解させることが大切である。時間は20分程度は必要で、この際かなり痛みを伴うが我慢する。融解は決して直接焔などで行ってはならない。融解後は再凍結に注意して保温を厳重にする。融解後水疱ができることも多いが、軟膏などをベタベタ塗ることは経過を悪くする。清潔な布かガーゼで覆う程度で、できるだけ早く局所を乾燥化させることがコツである。

凍傷は重度の場合は患指の切断という最悪の事態をまねき、一生障害を残すことになる。予防に勝る治療なしを銘記してほしい。かつて有名なクライマーに、厳冬期の壁をやっていれば、指の１本や２本失うのは仕方がない、と言われて仰天したことがある。自分の身体はもっと大切にしてほしいものだ。

図書紹介

立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊一九九三報告書『白き咆哮』

一九九三年十月二十四日、未踏の中国側北西稜をたどる新ルートを経て、チョモロンゾ峰（七八一六メートル）の登頂を果たした立教大学登山隊の公式報告書で、登頂一周年を前に、このほど刊行の運びとなった。山は登っても報告書がなかなか出ない隊が多い中で、この点でもあらためて隊の力を評価することができる。

本報告書は浜田総長の巻頭言にはじまり、PHOTO REPORT として鯵坂総隊長による写真集が三八ページにわたって巻頭を飾っている。

本文は、序章、チョモロンゾへの軌跡、登山隊報告、学術調査隊報告の四章からなり、参加隊員、関係者の分担執筆によってまとめられている。巻末には RANDOM REPORT として、トレッキング隊の報告、隊員の紹介、隊員の所感、募金協力者名簿、会計報告もあり、英文のサマリーもつけられている。

内容を通じて感じられるのは、分担執筆にもかかわらず、筋がよく整理されており、参考になる知見が多いことである。地域の概念図がないのが唯一残念な点であるが、今後この山域を目指す隊には、参考になる点が多いと思われる。

なお本格的な学術報告書が、別途刊行されるとのことで、この点の成果も期待したい。

一九九四年十月　立教大学チョモロンゾ委員会刊　B5判カラー写真三八ページ　本文一八八ページ。市販されてないが残部が若干あるので、希望者は本会事務局へ申し込めば三千円（送料込み）で入手可能。

（松田雄一）

白川義員作品集『南極大陸』上巻―超絶の天然―

「氷雪茫々（南極大陸）」のタイトルで始まるこの作品集は、とてつもないスケールをもった写真集である。また、文学書でもある。著者の多くの作品集の中の〝地球再発見による人間性回復へ〟シリーズ・第八作として制作されたもので、「アルプス」「ヒマラヤ」「アメリカ大陸」「聖書の世界」「中国大陸」「神々の原風景」「仏教伝来」に続く大作である。〝地球再発見〟のシリーズは三十二年前の『アルプス』からはじまっているが、無限の宇宙の中でケシ粒のごとき存在にすぎない地球。このケシ粒がいかに鮮烈で荘厳で神秘な美しさに満ちていることか、多くの人に知ってもらいたい、見せたい、著者の気持ちがそっくりそのままこの作品集を作り上げている。

英国のエディンバラ公と、エドモンド・ヒラリー卿の序文ではじまり、「氷雪茫々（南極大陸）」「氷上可憐（皇帝ペンギン）」「氷峰屹立（エルスワース山群）」に分けて綴られている。

一九九一年からの第一次南極撮影から九三年の三月まで、延べ八十五日にわたる大撮影行。作品を一枚一枚めくるうちに、南極大陸が壮大かつ神秘的な地であるかが実によく分かる。「氷上可憐」では皇帝ペンギンの可愛さに魅了されてしまう。エルスワース山群の氷雪の峰々、ヒマラヤとは絶対的に違う感覚である。とにかく、強烈な印象を得る大作品集である。カメラを持ったら、こんな作品にチャレンジしたいと思う。

一九九四年七月　小学館・刊　A3判　一七一ページ

（山口俊輔）

Helmut Dumler and Willi P. Burkhardt・著 DIADEM Books(London).一九九四年刊 THE HIGH MOUNTAINS OF THE ALPS Vol.1 The Four-Thousand-Metre Peaks

カール・ブロディヒ(Karl Blodig・一八五九年ウィーン生れ）はアルプス四千メートル全山登頂のアイディアを提唱し、これを実行しつつ、一九二三年に『アルプス四〇〇〇メートル』（"Die Viertausender der Alpen"・独語）を出版して好評を得た。その後何度かの改訂版を経て、このたび共著による英語版が発行された。

一九六八年に初の全四千メートル峰に登頂したダムラー(Dumler)の説明文と写真家ブルクハルト(Burkhardt)の写真が読者をひきつけ、百五十余の大小の写真と挿絵、ルート図による現状の解説などが懇切丁寧になされ、入門者からベテラン・一般の読者にも興味を与えている。

日本の百名山ブームのように、アルプスでは四千メートル六十一峰をもくろむ熱狂的な登山家が増えていると。

三〇ポンド　一二四ページ

（南井英弘）

Environmental Protection of the Himarayan:A Mounteineers View(Indus Publishing Company,NewDelhi,1994)

ヒマラヤン・ジャーナル社から寄贈されたこの図書は、一九二八年に創刊された同ジャーナルの第五十巻を記念して企画されたもので、標題のヒマラヤの環境保護問題についての郵送による紙上でのシンポジウムをまとめたものである。

編集を担当したアミール・アリ氏はスイスアルパインクラブのアルプス自然保護委員会の委員として活躍中の人であるが、アリ氏の序文に続いて二十一人の著名な登山家やヒマラヤの案内人などによって環境保護の問題が論じられている。

アリ氏は各論文のはじめに論者がどういう経歴の人であるかを簡単に紹介しているが、例えば「山、私の期待」の題で論じているロバート・M・マッコーネル氏はアメリカアルパインクラブの自然保護委員会の委員長であり、また、アルパインクラブの方針を述べたトニー・ストレーザー氏は一九九〇～一九九二年のアルパインクラブの会長を務めた人である。論者の中には日本人の名前はないが、アリ氏はHATIJからは一九九二年の東京シンポジウムの記録が送られたと紹介しており、エドモンド・ヒラリー卿などの発言を引用している。

問題のほとんどはゴミ、排泄物、燃料の問題であるが、それに伴っての森林破壊や観光化による住民の文化に対する影響までも論じられている。このような問題の解決法についての論述の中で、マッコーネル氏の提唱したソーラー・トイレット・システム（太陽熱ですべての排泄物を灰にしてから地中に埋める）と、それを実際にベースキャンプで使用してみた経験（A・K・ダット氏）などが興味をひく。またゴミについてはクリス・ボニントン氏らの何枚かの写真が有力に実態を物語っている。

最後の章では、IUAA（The International Union of Alpinist Associations）がヒマラヤの環境保全のための「掟」ともいうべき十項目を分かりやすくまとめた「ヒマラヤ行動規範」が紹介されている。

［寄贈本のため価格不明］（**澤井政信**）

カット　中村あや

書籍受入報告（1994年10月）

著　者	書　　名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
石田稔郎	韓国の自然と山：その魅力を語る	189pp／19cm	韓国登山同好会	1994	著者寄贈
金云基	小白山（写真集）：別付録・地図、ハングル版	293pp／31cm	忠清日報社(韓国)	1994	金鍾先氏寄贈
圖書出版（編）	韓國・國立公園（写真集）：英・ハングル二ケ国語版	153pp／26cm	國立公園管理公團(韓国)	1994	金鍾先氏寄贈
小倉厚	山のエッセイ：周辺的登山学	250pp／20cm	近代文藝社	1994	著者寄贈
泉康子	いまだ下山せず！：ドキュメント山岳遭難捜索	262pp／20cm	宝島社	1994	著者寄贈
加藤文太郎	單獨行（復刻版）：加藤文太郎遺稿集	232pp／23cm	浜坂町役場	1994	発行者寄贈
福岡山の会（編）	冬山目指して・冬山44年の歩み：創立60周年記念誌	129pp／26cm	福岡山の会	1992	発行者寄贈
北大山の会（編）	それぞれの山：日高山脈への再訪	287pp／22cm	北大山の会	1994	発行者寄贈
スポーツニッポン新聞社（編）	厳冬のサガルマータ（群馬県山岳連盟隊・写真集）：究極の挑戦・南西壁	175pp／31cm	毎日新聞社	1994	八木原圀明氏寄贈
畔上能力・他（共著）	山渓ポケット図鑑(No.3)：秋の花(野草・樹木・園芸植物)	767pp／17cm	山と渓谷社	1994	出版社寄贈
石井光造	静かな山スケッチ帖	158pp／21cm	白山書房	1994	出版社寄贈
ハバロフスク自然探検隊（編）	シベリア大冒険：東京っ子100人、緑の大地を行く	309pp／22cm	東京新聞出版局	1994	編者寄贈
西山秀夫（編）	ひと味違う名古屋からの山旅	211pp／20cm	七賢出版	1994	出版社寄贈
近畿山岳愛好会（編）	創立20周年記念誌（1994年）	268pp／26cm	近畿山岳愛好会	1994	発行者寄贈
西尾寿一	渓峰閑話（発行：京都山の会出版局）	214pp／19cm	ナカニシヤ出版	1994	著者寄贈
戸田博子（編）	志賀重昂：回想と資料（生誕百三十年記念誌）	287pp／27cm	戸田博子(私家版)	1994	編者寄贈
Don Reid	Yosemite Climbs : Free Climbs	413pp／23cm	Chockstone Press	1994	購入
Greg Child	Mixed Emotions : Mountaineering Writings of Greg Child	256pp／22cm	The Mountaineers	1993	購入
Kathleen Hopkirk	Central Asia : A Traveller's Companion	292pp／22cm	John Murray Ltd.	1993	購入

名誉会員動静

◆佐藤テル会員

十月二十四日、東京ベイホテル東急で開催されたソロプチミスト日本財団年次大会で「千嘉代子賞」受賞のため来日した。

受賞の理由は、職業婦人の草分けとして活躍した他、八十五歳の時、オーストラリアに移住し、日本から留学してくる学生の面倒をみたこと、また葉山町とグレネルグ市の姉妹都市締結に尽力してグレネルグ市から東洋人として初めての名誉市民に推挙されたことなどが評価されたものである。

◆今西壽雄会員

関西空港へのネパール航空直行便乗り入れに伴い、その第一便が十月三十日、カトマンズより飛来。同日折り返した日本からの第一便で、ネパール国の名誉総領事としての表敬訪問にネパールに出かけ、十一月六日帰国した。

年末年始休み

平成6年12月29日(木)
〜
平成7年1月5日(木)

日本山岳会のルームは例年どおり年末年始を休みます。

ルーム日誌

3日　アルパインスキークラブ
4日　図書委員会　アルパインスケッチクラブ
5日　青年部　学生部　山研委員会
6日　遭難対策委員会　自然保護専門委員会　学生部
7日　フィルムビデオクラブ
11日　二火会　図書委員会
12日　百年史委員会　93同期会　資料委員会
13日　理事会　学生部　アルパインスキークラブ
17日　総務委員会　組織改革委員会　科学研究委員会
18日　フィルムビデオ委員会　自然保護専門委員会
19日　三水会　アルパインスキークラブ
20日　学生部
21日　図書委員会
22日　オリエンテーション
24日　評議員会　集会委員会　資料委員会
25日　自然保護委員会
26日　自然保護専門委員会
27日　学生部
28日　財務委員会
29日　自然保護専門委員会

10月来室者551名

海外情報

●'94ボードマン・タスカー賞決まる

この賞は'83年エベレスト北東稜で遭難したボードマン・タスカーを記念して設けられたものだが、この権威ある賞についての短報（受賞作品）が次のとおり発表された。

"No Place To Fall"・Victor Saunders(Hodder & Stoughton), "At The Rising Of The Moon" Dermot Somers (Bâton Wicks Publ.). "Alps 4000"・Martin Moran(David & Charles). "We Aspired : The Last Innocent Americans"・Pete Sinclan(Utah State Univ. Press)

受賞作品はアルパイン・クラブで10月19日に発表される。

●バンフ・ブック・フェスティバルの立役者はジョー・シンプソン(Joe Simpson)

定着したフィルム・フェスティバルに併設予定の第1回バンフ・ブック・フェスティバルの開会演説を11月2日夜、作家でクライマーのジョー・シンプソンがするらしい。"Touching People", "The Game of Ghost"の確実な仕事が、彼の話題の中心となろう。

他に主なゲストは、アリスン・ハーグリーブス(Alism Hargreaves=A Hard Day's Summer)、オーストラリアのクライマー、グレイ・チルド(Grey Child=Mixed Emotions), ジョン・シャーマン(John Sherman=Stone Crusade)らで、それぞれの持ち味を出した話ができる。

("High"10月号より)

◆海外情報募集

会員に有用な海外の情報を募集しております。山に関する様々な話題、最新登山技術など、面白い情報をご存知の方は編集委員会までお寄せください。

会務報告

十月定例理事会

日時　十月十三日(水)十八時四十分～二十時

場所　日本山岳会会議室

【出席者】藤平会長、中村副会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、片岡、南川、伊藤、水野、南井、堀井、渡邊、溝口、中川、山本、大谷各理事、中島監事、斉藤、西村、宮下、重廣各常任評議員

【委任】鴫原副会長、松浦理事、川崎監事、湯浅、神崎各常任評議員

【審議事項】

一、会報「山」の広告について　小倉

広告は固定的な傾向にあるので、これを見直し、会員に対する情報提供に資するとともに、広告収入の増大をはかりたい。　承認

二、創立九十周年記念事業委員会について　小倉

各委員会の構成（案）は次のとおり。

●記念事業委員会

委員長　藤平正夫

副委員長　鴫原啓祐、中村純二

委　員　小倉茂暉、大森弘一郎、村井龍一

参　与　織内信彦、今西壽雄、山田二郎、村木潤次郎、大塚博美

●実行委員会

委員長　中村純二

委　員　小倉茂暉、大倉昌身、大森弘一郎、村井龍一、中川武、山口俊輔、南井英弘

●財務委員会

大倉昌身、川崎巌、西村政晃、橋本清

●募金委員会

小倉茂暉、飯野亨、石橋正美、井野千枝子

●式典委員会

中川武、宮下秀樹、堀嘉余子、藤田礼子

●記念フォーラム委員会

大森弘一郎、村井龍一、川合周

●百年史委員会

本誌　南井英弘、中島寛、松田雄一、岩淵泰郎、鈴木敬吾

映像　山口俊輔、羽田栄治、近藤隆治

顧問　望月達夫、織内信彦、松丸秀夫

●データバンク研究委員会

山口俊輔、石田要久、鈴木敬吾、誉田紘八郎　承認

三、マカルー実行委員会に、橋本龍太郎会員の顧問就任の件について　小倉　承認

四、「山岳」掲載文について　小倉

石田稔郎会員の自費出版「韓国の自然と山」に参考文献としての使用許可の要請がなされた。　承認

五、山研管理人について　小倉

現管理人島田満、田端光子両氏（昭和五十七年から勤務）から本年度限りで退職の申出があった。本会からの感謝状、慰労金を贈呈し、謝意を表する。後任者は未定　承認

六、不要図書について　水野

①一九七〇年以前発行の登山ガイドブックをルームに一か月ほど展示して、希望者に自由に持ち帰ってよいことにしたい。これに対し、資料委員会担当理事から「大迫山岳博物館に資料として打診したい。その返答後に処分を願いたい」旨の要請があった。②「吉阪隆正集」（全十七巻）は内容がほとんど建築関係であり、山岳に関係がないので、故人が所属していた早稲田大学稲門山岳会に寄贈したい。　以上承認

七、マカルー峰登山隊員第三次選考結果について　登山隊実行委員会・重廣

九月二十五日午後五時から登山隊事務局において、四名の応募者について書類・面接(二名)により選考した。この結果、小野岳（三十四歳・会員番号申請中）を内定したい。残り一名については、今後適任者がいれば適宜選考委員会で決定したい。　承認

【報告事項】

一、マカルー峰登山隊関連　村井、小倉、大倉

十月中旬から隊荷梱包作業に入る。その手伝い要請を会報十月号に掲載。二月中旬には先発隊が出発する。壮行会は二月十日に実施の予定。中国に登山料ほかとして一千万円、国内費用として百万円を登山隊実行委員会に本会財務部から仮払いしたい。

二、海外登山基金助成登山隊結果について（会報三月号参照）　村井

①マッキンリー気象観測機器設置登山隊は六月二十五日登頂、同月三十日帰国　②富山県山岳連盟ガッシャーブルム遠征隊は八月十二日、三名が登頂　③慶応義塾トランゴ登攀チームは未完登、十月上旬帰国する　④山岳同志会チベット遠征隊は、事情により遠征延期のため、九月二十六日に全額返還された。

三、第二回青登懇について　村井

平成七年二月二十五～二十六日に実施予定。実行委員は、中川、大谷、片岡、溝口各理事があたる。

四、第三十一回マラソン大会を皇居周回コースで行う。　学生部・山本

十一月二十日九時集合、十四時三十分表彰式。

五、秋の小川山集会を学生部と合同で行う。　青年部・村井

十月二十二～二十三日、青年部は金峰山荘前（直営バンガロー宿泊）、学生部は回り目平（キャンプ場宿泊）。

六、「山研」関係　小倉

韓国山岳会においては同国国立公園内に本会の「山研」同様の施設を設置したいという意向で、建設に伴う手続きなどについて本会に問い合わせがあった。

七、一〇四号会議室（三室）に四十名分の会議用机を配置した。

リフォーム委員会・中川

八、十一月十一日、群馬岳連の報告会を開催する。　高所委員会・渡邊

九、科学・医療委員会共催のシンポジウム「登山と疲労」について　堀井

十一月十九日、青山学院で開催。会費千円（会報九月号参照）。

十、全国支部懇談会開催について　関西支部・西村

十月十五～十六日、兵庫県ハチ高原氷ノ山で開催する。会員多数の参加をお待ちする。（今後、名称を「全国支部懇談会」に統一する）

十一、「山」九月号『海外の山』＝江本嘉伸＝掲載の中高年登山隊のその後の情報として、①エベレスト還暦登山を目指した宮原巍会員は八七〇〇メートルまで、貫田宗男会員は登頂。②「シルバー・タートル・ダウラギリ主峰登山隊」（五十三～五十七歳の七名、隊長・石川富康）は五名が登頂に成功した。

以上の他、藤平会長から国体登山競技に関する話があった。

【委員会報告】

●図書委員会　第二回山を読むシリーズ「山日記の一生」、講師・松丸秀夫、坂本矩祥（十月二十一日　JACルーム）

●資料委員会　故広瀬潔名誉会員宅寄贈のレルヒ中佐当時のスキーは、遺族の希望もあり、上越市立スキー発祥資料館へ寄託したい（十一月の予定）。

●フィルムビデオ委員会　フォトビデオクラブとの共催の撮影会（十月十五～十六日・奥日光）の参加予定者は十七名。

●総務委員会　全国支部懇談会（十月十五～十六日・氷ノ山）、オリエンテーション（十月二十二日、十四時JACルーム）、年次晩餐会（十二月三日新高輪プリンスホテル）。

●集会委員会　懇親山行（十二月四日）

●自然保護専門委員会　十月二十三～二十五日、白神山地で根深氏や地元を交えた講座を行った。

●青年部　例会兼報告会（十月五日・「ムスターグ・アタ峰からトムール峰へ」講師・吉田宣明氏＝横浜市立大学）

【新入会員】

雑賀一他二十四名。

INFORMATION

◆講演会「山の高さの測定」　科学研究委員会

日時　一九九五年一月二十五日㈬　十八時三十分～二十一時

場所　日本山岳会集会室

講師　鈴木弘道

テーマ　GPS等によるエベレストの標高の新測定（イタリア・中国・ネパール隊）および富士山の水準測量のビデオによる説明と著書『山の高さ』について。

■変更　十一月号のインフォメーションでご案内した後藤三男会員の東急日本橋店における油絵展は、一月十三日㈮～十八日㈬に変更になりました。

■会員異動

▼物故　岩瀬浩（七一九八）6・5　河野幾雄（四六〇一）6・8・7　岡本龍行（五五一五）6・9・15　長尾幸七（八九五八）6・9・19　山本敏三（一五二六）6・9・29　山口一孝（四六四五）6・9・29

▼退会　大田原昭雄（六九〇九）6・10・31

▼改姓　吉田彌（一〇五一八）→戸來　岩崎真知（一一六〇四）→河瀬

■訂正　十一月号（No.五九四）の一～二ページ「ルームの今昔」の記事中、「安達源一郎さん」は「足立源一郎さん」の、「改築」（三か所）は「改装」の、「諸兄姉」（一ページ二段七行目）は「諸君」の、「借りて」（二ページ上段一行）は「かりて」の、「いたのでは」（二ページ二十四行目）は「いたことでは」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

●編集後記

平成六年もあと残りわずかになりました。この一年、会員の皆様方からお寄せいただいたご支援、ご協力に感謝いたします。来年も、どしどし原稿をお寄せください。また「広告」も積極的に募集することにいたしましたので、よろしくご協力をお願いいたします。

では、よいお年を！

会報編集委員会

日本山岳会会報　山　595号

1994年（平成6年）12月20日発行

発行所　社団法人日本山岳会

〒102 東京都千代田区四番町5－4 サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261－4433

振替口座　東京3－4829

発行者　藤平正夫

編集人　伊藤　敞

印　刷　株式会社　双陽社